

チャラカ・サンヒターのプラーナ説 他学派の見解との比較考察

著者	長友 泰潤
雑誌名	論集
巻	38
発行年	2011-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130307

チャラカ・サンヒターのプラーナ説

——他学派の見解との比較考察——

長 友 泰 潤

序論

印度諸学派の風（ヴァーユ・ヴァータ）、生氣（プラーナ）について検討していく。これらは風あるいは生氣という語で表わされることが多いが、様々な意味で使われる。印度諸学派の見解においても、学派によって異なった捉え方がなされており、それぞれの学派の特色を示している。本稿では、まず、印度医学論書であるチャラカ・サンヒターの風・生氣についての見解を詳細に考察し、その用法について明らかにする。さらに、以前から研究対象としてきた、サーンクヤ学派の風・生氣についての解釈と比較考察し、その意味について解明する。

最後に、風（ヴァーユ）や生氣（プラーナ）について最も詳細な記述の見られる、シャンカラのブラフマーストラに対する注釈書ブラフマーストラパーシュヤの見解を詳細に考察し、チャラカ・サンヒターの風・生氣についての見解と比較考察する。これらの検討によって、印度諸学派の学説における風や生氣の意味について、明らかにしていく。

1. チャラカ・サンヒター（Carakasamhitā, 以下CS）のプラーナ説

まず、CSのプラーナ（生氣）と風（ヴァーユ）について検討して行く。医学論書であるCSでは、身体中の風の増大と減少が身体の好不調に関わると考えていたようである。乾燥、軽さ、冷たさ、激しさ、清さ、荒さ、空洞性をもたらすものは風に対して増加作用を持ち、湿り、重さ、温かさ、滑らかさ、軟らかさ、密集性をもたらすものは鎮静作用をもつ。このように、風の身体中で、増加と減少が身体の好不調に影響する¹。

1 Carakasamhitā, (以下CS) ed. by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, VOL. XCIV. Vol.I., p.236., ll. 10-16 矢野道雄『インド医学概論』（科学の名著第Ⅱ期）春

また、風が正常な状態であれば、身体の組織を保持するものであり、プラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなる。これらは、様々な作用を促進させ、マナスを制御し導き、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体に運ぶものであり、身体すべての組織を統合するものである。さらに、風は言葉を発せしめるものであり、接触と音の本源であり、聴覚と触覚の根本であり、歓喜と活力との母胎であり、火を煽るものであり、病素を潤渇させ、分泌物を対外へ排泄させ、大小の脈管の通りをよくし、胎児の形成にあずかり、生命の持続の因である²。このように、風はマナスを制御し、すべての感官を活動させ、病気から身体を守り、身体を正常に保つ生命持続の原因である。

この風が体内で、正常ではなく、激化した時には、身体を様々な病気で苦しめ、体力、容色、健康、寿命を破壊し、さらに、マナスを混乱させ、すべての感官を阻害する。さらに、胎児を殺したり、奇形を生ぜしめたり、流産を誘発したり、恐怖、悲嘆、迷妄、消沈、妄語を生ぜしめ、生命（プラーナ）を閉塞させる³。風は激化するとマナスを混乱させ、感官を阻害し、身体的、精神的な病の原因となり、医学的に対処すべき様々な病気の原因が、風の激化であることを示している。

また、風は自然界の様々な現象の原因とされている。正常な状態にある風は、自然界では、大地を支え、火の燃焼を盛んにし、太陽、月、星宿、惑星の恒常な運行を設定し、雲を生じ、雨を降らせ、川の流れを促し、花を開かせ実を結ばせ、萌え出るものを発芽させ、季節を分け、元素に様々な形をとらせ、元素の量と形状を顕現させ、種子を発芽させ、穀物を成長させ、湿潤を防ぎ、乾燥させ、形状の定まっていないものに形状を与える⁴。このように、風は、太陽や月、星の運行という、宇宙的な運動変化から、身近な出来事である植物の成長や季節の変化までのさまざまな現象の原因となっている。

この風が、自然界で激化したとき、山の頂上を揺り動かせ、樹木を根こそぎにし、海洋を波立たせ、湖水を氾濫させ、河を逆流させ、大地を揺り動かせ、雨雲を膨張させ、霧、雷鳴、砂塵、砂礫、魚、蛙、蛇、灰燼、血、石、電光を

秋社 p.84参照

2 CS, Vol.I., p.237., II.15-20 矢野上掲書 p.86参照

3 CS, Vol.I., p.237., II.35~p.238., I.3 矢野上掲書 p.86参照

4 CS, Vol.I., p.237., II.11-15 矢野上掲書 p.86参照

生じる。さらに、六つの季節を破壊し、作物の不作をもたらし、生物に疫病を生じ、生類を滅亡させ、四つのユガの週末をもたらす⁵。激化した風は、嵐を呼び、疫病を生じ、生類を滅亡させる。

医学論書である CS には、身体内で激化する風と医者との関係についても述べられている。すなわち、もし、風がきわめて強力で、激しく迅速な作用をし、緊急の対応を要するものであるということを知らなければ、突然激化した風に対応しなければならない医者は、どうして最初に死の恐れから患者を救うために、前もってその風を抑えておくことができようか。また風をしかるべく賞賛することも、体力や容色の増進のための精力の増強と蓄積のため、知力の発揮のため、さらには寿命を最高度にのばすために役立つ⁶。このように、医者は風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対処すべきものとされている。

2. サーンクヤ学派のプラーナ説

サーンクヤ学派はチャラカ・サンヒターの諸説に多くの影響を与えており、類似した言及も多く見られる。そこで、ガウダパーダバーシュヤ（以下 GBh）とタットヴァカウムディー（以下 TK）を見ていこう。

a) GBhのプラーナ説

GBhでは、プラーナ等の五風、すなわち、プラーナ、アパーナ、サマーナ、ウダーナ、ヴァーナは全ての感官に共通なる機能であり、その流動する働きこそが、十三種の作具にとっても、また、共通な機能である。籠の鳥が動くときに、籠も動くように、プラーナ等がある場合に、作具は生命を得るとする⁷。

また、それぞれの風について、プラーナは吸収するものであり、アパーナは去るものであり、サマーナは食物を平等に配送するものであるとする⁸。次に、残りの二つについては、昇騰し、増進し、上に導くがゆえに、ウダーナと呼ば

5 CS, Vol.I., p.238., II.28-33 矢野上掲書 p.86参照

6 CS, Vol.I., p.240., II.20-23 矢野上掲書 p.87参照

7 Gauḍapādabhāṣya (以下 GBh) ed by Dr.T.G.Mainkar., Oriental Book Agency, Poona 1972, p.122., II.28-31 中村了昭 『サーンクヤ哲学の研究』 昭和57年 大東出版社 p.460参照

8 GR p.122., I.31~p.123., I.2 中村上掲書 pp.460-461参照

れ、臍の部分から頭の内部を活動領域とし、この流動は一切の作具に共通する機能である。また、ヴァーナは身体に遍満し、体内を区分し、多数の作具の共通な機能である。このように、五風は十三種の作具に共通する機能である⁹。

b) TK のプラーナ説

TK では、プラーナ等の五風は共通な作具の機能であり、三つの作具（ブッディ、アハンカーラ、マナス）にとっても、五風は生命であり、機能であるとする。この五風がなければ、これら内的器官も存在しないとする。また、この五風の中で、プラーナは鼻先より心臓・臍を通り、足元へ働き、アパーナ以下の風もそれぞれ身体の各所における働きがある¹⁰。

さらに、ブッディ等の三内感にプラーナ等の五風の作用があり、それによって、身体が保持されるとされる¹¹。

小結

上記のサーンクヤ学派の GBh と TK のプラーナ説とチャラカ・サンヒターのプラーナ説を比較検討してみよう。CS では風（ヴァータ）が身体中で、増加したり、減少したりするものと考えていたようである。GBh や TK のプラーナ等も身体中で働く点では同じである。

CS では、風が正常な状態にある場合に、マナスを制御し、すべての感官を活動させるとされる。この見解は、プラーナがブッディ、アハンカーラ、マナスの三つの内的器官に作用するという TK の説よりも、すべての感官を含む十三種の作具に共通する機能とみる GBh の説に近いものである。

しかし、CS には、正常な風が、身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命維持の原因となることや、激化した風が、マナスを混乱させ、感官を阻害し、身体的、精神的病の原因となることが述べ

9 GP, p.123., II.2-6 中村上掲書 p.461参照

10 Sāṃkhyatattvakaumḍī (以下 TK) ed. by OM Prakasha Pandeya., Chowkhamba Saraswatibhawan Varanasi 1981 p.123 金倉圓照 『真理の月光』昭和59年 講談社 pp.168-169参照

長友泰潤 「シャンカラパーシュヤのマナス説ーサーンクヤ学派との比較研究ー」南九州大学研究報告 人文社会科学編37号 (B), 2007.4 pp.13-19参照

11 TK ad SK.32 p.128, 金倉上掲書 p.176参照

られている。また、太陽や月の運行、季節等の自然現象にも影響を与えていることや、医者が激化した風に対応し、特に病気の原因となる場合には、緊急に対応すべきであるという言及がある。このような風についての言及は GBh や TK には見られないものである。

3. プラフマーストラバーシュヤ（以下、BSb）の風（ヴァーユ）や生氣（プラナー）

BSb における風（ヴァーユ）や生氣（プラナー）についての言及をもとに、その概念、用法を考察すると、これらの言葉が、三つの異なる意味を持つことがわかる。すなわち、器官、個人の生氣、宇宙的氣息（プラフマンと同義の場合もある）である。

a) 器官としての風・生氣

まず、BSb では、生氣（プラナー）はプラフマンから生じるとされる。また生氣（プラナー）は、十一の器官、すなわち、五つの知覚器官、五つの作業器官、そして意（マナス）であるともされている¹²。

b) 個人の生氣

個人の生氣に関しては、風が、身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住しているときに、それは、生氣（プラナー）と呼ばれるとされる。プラナーは風が身体に入ってからと呼称であり、個人の生氣を意味する¹³。また、個人の生氣が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生氣は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生氣と器官は別物とされる¹⁴。個人の生氣は五つの機能を持つとされる。すなわち、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気（プラナー）、後方への機能で、入る息等の作

12 Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya (以下 BSb) edited with special references from Ratnaprabhā Nyāyanirṇaya etc. by K.L.Joshi Parimal Publications Vol.1,2 Parimal Sanskrit Series No.1 1996 BSbVol.2 p.629.,1.9~p.630.,1.1 金倉円照 『シャンカラの哲学』下 p.35 p.86

13 BSb Vol.2 p.640 ll.12-14 金倉上掲書下 p.122参照

14 BSb Vol.2 p.641 ll.1-18 金倉上掲書下 p.125参照

業をする吸気（アパーナ）、両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる媒気（ヴァーナ）、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気（ウダーナ）、身体の一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ等気（サマーナ）といった、五つの機能である¹⁵。

さらに、主要な生氣と残りの生氣は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている¹⁶。また、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。それは、聖典において、生氣と器官が別々に表示されているからである¹⁷。主要の生氣と残りの生氣（器官）との違いは、器官が熟睡している時、主要な生氣は独り目覚めており、そして、主要な生氣は死に襲われない。また主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではない。このような違いが、両者にあるとされる¹⁸。

c) 宇宙的氣息

宇宙的氣息たる風（ヴァーユ）が、プルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通過して、太陽に達するとされる。プルシャはヴァーユに達して、さらに太陽に到達するとされる¹⁹。また、論者の主張として、生氣が五種にはたらく風であることや、この一切の世界が、生氣と名付けられ、五つにはたらく風に安住して、動揺し、風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされる。すなわち、風が雨雲の状態で回転する時、電光、電鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとされる。また、聖典が引用され、ヴァーユ（風神）はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つとの言及が示されている。これを受けて、ヴェーダーンタ派の答として、この風（ヴァーユ）がブラフマンであると承認されると言う。ここで、風はブラフマンそのものと解される²⁰。

15 BSb Vol.2 p.641 l.26~p.642 l.4 金倉上掲書下 p.126参照

16 BSb Vol.2 p.642 ll.11-14 金倉上掲書下 p.127参照

17 BSb Vol.2 p.647 ll.4-7 金倉上掲書下 p.133参照

18 BSb Vol.2 p.648 ll.7-11 金倉上掲書下 p.135参照

19 BSb Vol.2 p.987 l.11 金倉上掲書下 p.552参照

BSb Vol.2 p.988 ll.9-11 金倉上掲書下 p.553参照

20 BSb Vol.2 p.989 ll.4-5 金倉上掲書下 p.554参照

BSb Vol.1 p.359 l.7~p.360 l.3

4. ブラフマーストラパーシュヤのプラーナ説とチャラカ・サンヒターの説との比較研究

BSb では、風が、身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住しているときに、それは、生氣（プラーナ）と呼ばれるとされる。プラーナは風が身体に入ってからと呼称であり、個人の生氣を意味する。個人の生氣が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生氣は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生氣と器官は別物とされる。

さらに、個人の生氣には五つの機能があるとされる。すなわち、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気（プラーナ）、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気（アパーナ）、両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる媒気（ヴァーナ）、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気（ウダーナ）、身体の一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ等気（サマーナ）である。

また、主要な生氣と残りの生氣は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。さらに、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。それは、聖典において、生氣と器官が別々に表示されているからである。

さらに、主要の生氣と残りの生氣（器官）との違いについて述べられている。すなわち、器官が熟睡している時、主要な生氣は独り目覚めており、主要な生氣は死に襲われない。また主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではない。このような違いが、両者にあるとされる。

一方、CS では、BSb とは違い、主要な生氣と残りの生氣（器官）との区別は示されていない。しかし、風（ヴァータ・ヴァーユ）が基本的な元素であることは同じであり、乾燥・軽さ等によって、増大し、湿り・重さ等によって減少するとされ、風の性質ではなく、風を増大させたり、減少させたりする外的要因について述べられている。また、風はプラーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされる。この説明は BSb の個人の生氣の説明に類似している。

次に、CS では、正常な状態にある風がマナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとされる。これは、BSb で、生気は微塵である理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満しているとする考え方と類似しているが、風がマナスを制御するという説は見られない。

また、CS では、風は、身体のさまざまな機能を有効に働かせ、病気から守り、生命を保つ生命維持の原因とされる。これは、BSb の、主要な生気のみが身体の維持と滅亡の理由となるとする考え方に類似している。

そして、CS では、医学的な言及が見られる。病気等の原因となる突然激化する風に医者是对処しなければならず、また、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役に立つとされる。このような言及は、BSb には見られない。これは医学書特有の見解と考えられる。

BSb では、CS が説くようには太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風は想定していないが、風あるいは風神がブラフマンそのものと解されている箇所があり、風がブラフマンそのものであれば、CS が説く風の、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化に対する働きは、ブラフマンに帰すことができるものである。

結論

サーンクヤ学派の GBh と TK のプラーナ説と CS のプラーナ説を比較してみると、CS では風（ヴァータ）は身体中で、増加したり、減少したりするものであり、これは GBh や TK のプラーナ等が身体中で働くことと一致している。また、CS では、正常な状態にある風は、マナスを制御し、すべての感官を活動させる。これは、プラーナがブッディ、アハンカーラ、マナスの三つの内的器官に作用するという TK の説よりも、すべての感官を含む十三種の作具に共通する機能とみる GBh の説に近いものである。

しかし、CS には、正常な風が、身体の組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命維持の原因となることや、激化した風が、マナスを混乱させ、感官を障害し、身体的、精神的病の原因となることが述べられている。また、太陽や月の運行、季節等の自然現象にも影響を与えていることや、医者が激化した風に対応し、特に病気の原因となる場合には、緊急に対応すべきであるという言及がある。このような風についての言及は GBh や

TK には見られないものである。

BSb では風が、身体に入って、生氣（プラナー）と呼ばれ、これが、個人の生氣を意味する。この個人の生氣には五つの機能があり、それぞれ、プラナー、アパーナ、ヴァーナ、ウダーナ、サマーナと呼ばれる。また、個人の生氣が身体から出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊する。このため、生氣は身体と器官の存立に生氣は欠かせない存在である。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生氣と器官は別物とされる。また、主要な生氣と残りの生氣は微塵であるとされている。理由として、呼吸等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。

一方、CS には、生氣（プラナー）を器官と明言するような説明は見られない。CS では、風（ヴァータ・ヴァーユ）はプラナー、ウダーナ、ヴィヤーナ、アパーナ、サマーナからなり、身体を保持するものとされる。これは BSb の個人の生氣に類似している。次に、CS では、正常な状態にある風がマナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとされる。これは、BSb の、生氣は微塵である理由として、呼吸等の五つの機能によって、全身に遍満しているとする考え方と類似しているが、風がマナスを制御するという説は見られない。また、CS では、風は、身体のさまざまな機能を有効に働かせ、病気から守り、生命を保つ生命維持の原因とされる。これは、BSb の、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となるとする考え方に類似している。

そして、CS では、病気等の原因となる突然激化する風に医者是对処しなければならず、また、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役に立つとされる。このような言及は、GBh や TK と同様に、BSb には見られない。これは医学書特有の見解と考えられる。

また、BSb では、CS が説く、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風は想定していないが、風あるいは風神がブラフマンそのものと解されている箇所があり、風がブラフマンそのものであれば、CS が説く風の太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化に対する働きは、BSb ではブラフマンそのものとしての風、風神に帰することができる。

しかし、CS が説く、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風が、CS 独自のものか、或いは、他の学派の学説の影響下にあるものかどうかについては、さらなる検討が必要である。

On the theory of Prāṇa in Carakasamhitā

Taijun NAGATOMO

In the view of Carakasamhitā (CS), vāyu (or prāṇa) does not mean the ten ordinary organs and the Brahman itself, it consists of prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna. And it brings the object perceived by the five sense organs and the manas to the ātman. So internal organs like the manas and the buddhi, have in common the function vāyu (or prāṇa). The internal organs are connected to the five sense organs by this function. The vāyu (or prāṇa) also plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It conserves good health, improves strength and complexion, luster, growth, and contributes to the attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about compactness and movement among the sun, moon, stars and planets, while sustaining the earth.

In the view of the two commentaries on Sāṅkhyakārikā, that are Sāṅkhyatattvakaumḍī (TK) and Gaudapādabhāṣya (GBh), present a view that recognizes two classes of sense-organs, i.e., the external ones and the internal ones. The external organs are the five sense organs and the internal organs are manas, ahankāra, buddhi. These internal organs have in common the function prāṇa. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prāṇa plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs.

In the theory of the Śāṅkarabhāṣya (SBh), Śāṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu (or prāṇa) has three meanings, namely, the ten ordinary organs, the internal five winds and the god of wind. Vāyu comes into the Self and divides into five parts. Each of which has a special quality. These parts are sometimes individually called prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five Vāyu (or prāṇa) aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference among these three schools. In the CS, vāyu (or prāṇa) brings about cohesiveness and movement among sun, moon, stars and planet, while sustaining the earth. However these other schools, have no mention of the relationship between vāyu (or prāṇa) and the natural phenomenon like the sun and earth. But in the view of the SBh, Vāyu sometimes means the Brahman. The Brahman can bring about cohesiveness and movement among sun and planet.